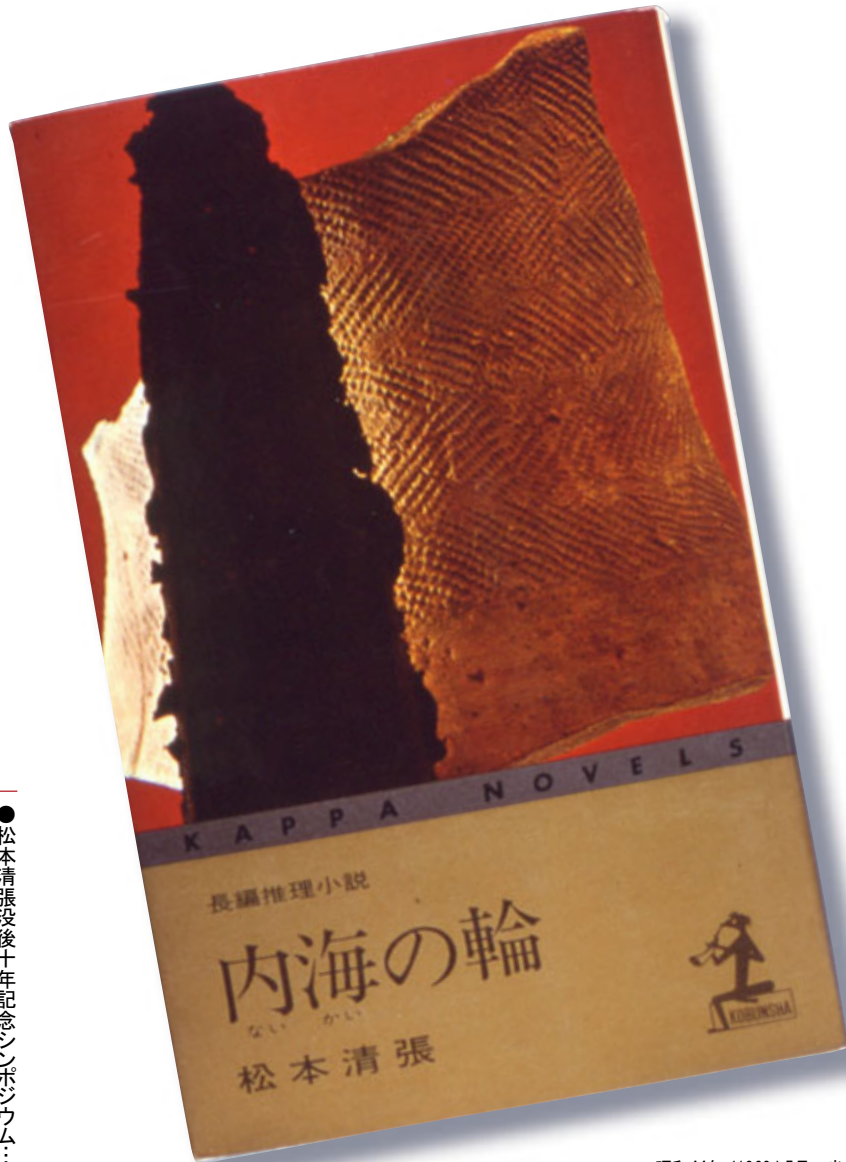


# 松本清張記念館

◆館報◆  
2002. 3  
第9号

## ミッシンゲ・リンゲ 失われた欠片



昭和44年(1969)5月 光文社

「内海の輪」は、『週刊朝日』昭和四十三年二月十六日号から「霧笛の町」の原題で連載された。  
連作推理『黒の様式』の最終作・第六話である。  
写真の『内海の輪』には  
「死んだ馬」(昭和四十四年三月『小説室石』)も収録されている。  
現在入手できる本  
松本清張全集 第九巻(文藝春秋)  
内海の輪(角川文庫)

### 目次

- 松本清張没後十年記念シンポジウム……2  
講演「清張さんの思い出」中江利忠  
パネルディスカッション「松本清張と朝日新聞社」
- 平成十三年度市民文芸講座……4
- みんなの広場……5
- 友の会活動報告……5
- お知らせ……6
- 北九州文学マップ……6
- 展示品紹介……7
- 探検！清張記念館……7
- トピックス……8

### 作品紹介

大学助教授の江村宗三は考古学の有望な新進学徒で、教授の椅子もまだかであった。愛人の美奈子は彼の元兄嫁で、今は愛媛県松山市で、二十才上の洋品店主と再婚していた。宗三にも妻があったが、東京で再会した一人は三月月に二度の美奈子の上京を利用して、情事を重ねた。

一年ほどが過ぎたころ、二人は尾道での逢い引きを計画する。岡山で落ちあい、次の日倉敷に遊び、尾道で同宿した。その夜、美奈子はもう一晩「泊りたい」と言い出した。翌日は朝にいき仙酔島に渡った。彼女は前の主張を繰り返した。「危険な女」がそこにいた。結局、次の日飛行機を使えば早く帰れるという彼女のへ妙案に、宗三は引きずられしてしまう。

有馬温泉にむかう途中、伊丹空港で新聞記者の長谷徹に出会った。長谷とは一人とも知り合いだった。動揺した美奈子は宿で、宗三に、もう今の夫とは離婚する、妊娠もしていると詰めよった。宗三は絶望に落ちた。このままでは、家庭は崩壊し、大学からも放逐される。彼は憎んだ。翌日、宗三は美奈子を蓬莱峽という名所に誘い、一緒に山の中に入った。出てきてタクシーに乗ったのは、宗三だけであった。

一年近く経った。ある発掘の依頼が宗三の大学にきた。そこは兵庫県の山麓中で、蓬莱峽の中にあつた。現地に着くと、一週間前、この山で女の死体が発見されていた。捜査も始まっていたが、死体は白骨化し身元も知れなかった。ぶじ帰京する宗三の懐には、偶然掘り出したガラス釧(腕輪)が隠されていた。考古学上最大の発見だった。だが発見場所が悪い。公然と発表はできない。しかし、誰かに見せたいと悩んだ末、とうとう宗三は負けた。ほんの小さな綻びだった。が、そこから波紋の輪のように破綻は広がっていた。だが状況証拠ばかりで、「確定の輪」が欠けている。警察は「失われた欠片(ミッシングリング)」を捜し求めた。……それは意外なところから発見された。

(学芸担当 中川 里志)



なかえ・としただ ●朝日新聞社顧問。朝日新聞東京本社経済部長・編集局長を経て、平成8年まで代表取締役社長。平成3年には松本清張と朝日新聞社専用機で日本上空を飛行し、翌年清張永眠の際は、代表して弔辞を述べた。

### 清張さんとの接点

「ご存知のように、清張さんは朝日新聞社の西部本社に入られて、その後、作家としての道を歩まれたわけですが、ご本人の希望で東京本社に転動になりました。昭和二十八年の秋ですが、私は同じ年の春に朝日新聞社に入りました。清張さんの名前はかすかに知っている程度で、後に御親交いただくとはまったく予想しておりませんでした。

清張さんとお付き合いたくようになり、ましたのは『週刊朝日』での連載の頃からだったと思います。昭和四十二年から四十三年にかけて「黒の様式」というシリーズが、引き続き四十四年から四十七年にかけて「黒の図説」というシリーズがありました。この頃、私は経済部のデスクでしたが、数回、断片的に日本の財界の裏話を「進講申し上げた」ことがありました。

昭和五十七年から五十八年にかけて朝日新聞本紙で「迷走地図」の連載がありました。この時私は編集局長で連載のお礼の意味で食事を共にさせて頂きました。多分、その頃から清張さんが私を「い奴だ」というかんじで、お声を

かけていただいたかと思えます。

その後、昭和六十一年から亡くなるまでの六年間、たしか五回くらい、夜食事をしながら懇談させていただいたことがあります。清張さんはあまりお酒は飲みませんが、食事についてはうるさいほうでした。

### 「おわかれ会」での弔辞

清張さんの「ご世界を初めて知ったのは、ラジオのニュースだったと思います。遺族の方から弔辞を、というお話を頂きました。

実はおわかれ会の日には甲子園大会の開会式にぶつかっていました。開会式は九時からで、おわかれ会は午後一時半からです。その年は始球式で文部大臣が投げられず、私が大会会長として挨拶した後、始球式も務めることになりました。この始球式終了の時間から計算すると、本当にぎりぎりなんです。とにかく間に合うようにやろうと、そこで動員されたのが朝日新聞社の二機のヘリとジェット機です。

始球式の後、球場から移動する車の中で「二ホム」から礼服に着替え、西宮の川原で朝日のヘリに乗り換えて伊丹空港に行きました。伊丹空港から社のジェット機で羽田に向かい、羽田からヘリで東京築地の本社に移動し、屋上に降りて、車で青山斎場に行きました。この間、ざっと一時間でした。航空部に言わせるとスピードの新記録です。その時の千早という名前のジェット機は、八ヶ月前に清張さんと私が一緒に乗ったものでした。感慨深く思い出しながら向かったお別れの会では、「ジェット機の隣の

# 松本清張没後10年記念シンポジウム

2月26日(火) 小倉リーセントホテル  
松本清張の没後10年を記念して開催されたシンポジウムにおける講演とパネルディスカッションの内容をご紹介します。



朝日新聞社専用機内の清張と中江氏

## 清張さんの思い出

講演 清張を語る Nakae Toshitada 中江利忠

空のシートに八ヶ月前の青年のような清張さんが幻となつて鎮座しておられました」という弔辞を読ませて頂きました。

### セスナの旅

清張さんが「私の作品の舞台を、ジェット機に乗って見たいんですよ」とおっしゃったのがきっかけで、空の旅を二緒しました。亡くなる前の年の十二月の始めでした。朝日のジェット機に乗って自分の作品の舞台を空から眺めると、というのが清張さんの長年の夢だったようです。

「この時にまわったのは、「波の塔」の舞台になった富士山麓の青木ヶ原樹海、「ひとりの武将」の立山連峰、「ゼロの焦点」の能登金剛、「内海の輪」の岡山県牛窓、「陸行水行」の大分県安心院、「点と線」の福岡県香椎海岸などです。

山梨県の早川渓谷を通った時、「ここは次の小説に出てきますよ」とおっしゃっていました。『週刊新潮』に連載中、病気休載のまま絶筆になりました「江戸綺談甲州霊獄党」の舞台になったわけです。

ちょうど吉野ヶ里遺跡がブームになっており、ましたし、雲仙普賢岳が大きな噴煙を上げているときでした。パイロットはできるだけそういうところも見せたいということで、吉野ヶ里では高度三〇〇メートルまで降りてみたり、雲仙普賢岳では頂上すれすれで噴煙をかぶるようなかんじもし、若干肝を冷やすこともありました。

清張さんは大変喜んで、愛用の新型コンパクトカメラをお持ちになって、シートベルトをはずして、左の窓、右の窓と、飛行機の中をあちこち回って写真を撮り、シャッターを盛んに押しておられました。興奮のあまり撮影に





失敗されて、後で、それこそ少年のように悔しがられる場面もありました。東京に帰りまして二日後に長文のお礼を頂いたのですが、その中で「小生のカメラで装填したフィルムが巻き取りの状態になっていないのに気づかず空回りでシャッターを切ったのは初歩的な大失敗で返す返すも無念残念でした。千載の好機を逸した思いです」と。このいうことを率直にお書きになって、ああ、清張さんらしいなと、懐かしい思い出になっております。

博多で泊して、二日目は福岡空港を出て吉野ヶ里、雲仙等を見て、五島列島、壱岐・対馬、それから隠岐島もみて、能登半島から南北アルプス、富士山の周辺を通って帰りました。能登に向かう途中で突然、中江さんのルーツの丹後を通りましようよとおっしゃってくださいました。これもそれぞれカメラを駆使して撮ったのですけれども、その時は逆に私がフィルムの装填を失敗して、後で逆に清張さんの写真を頂いた記憶がございます。

その思い出というのが清張さんにとっても大変印象に残ったようでした。お帰りになってからも一ヶ月くらい、良かったと盛んにおっしゃっていたそうです。そういうところが甲斐の依頼につながったのではないかと思います。

### 清張さんと朝日新聞社



皆さんご存知のように、朝日新聞社時代、広告部員としての立場は必ずしも本人にとつて満足すべきものではなかったと自らもおっしゃっております。けれども、在籍中に必ずしも重用されなかった気持ちも、逆に発奮の材料となって作家への道が開けたと、そういう思いを常にお持ちになっていたようであり、私との懇談の席でもよくお話しになっていらっしゃいました。社機に乗ったことでこれがふぎれたという感じをお持ちだったようですよ。

その前に、私が社長になって最初の朝日賞の時も受賞者に清張さんが入っておられました。このときも大変喜んでおられました。なんと申しまして二十年も大先輩の清張さんに可愛がられ、大変光栄でラッキーだったと思っております。清張さんは、新聞記者になりましたかったようなことをちよつとおっしゃったことがありますが、私も清張さんのあの幅広い奥深い取材力に敬服しながらこれに見習ってやらせていただいたこともございました。清張さんの没後十年で、そういった思いを改めて深くつづけていきたいと思います。

## パネルディスカッション 「松本清張と朝日新聞社」

中江利忠(朝日新聞社顧問)  
安間隆次(北九州市民文化大学運営委員長)  
コーディネーター／小林慎也(梅光学院大学教授)



●安間隆次氏



●中江利忠氏



●小林慎也氏

講演にひきつづき、「松本清張と朝日新聞社」と題してパネルディスカッションが行われました。  
パネリストは、特に最晩年親交を深めた中江氏、作家としての清張と親交のあった安間隆次氏、清張の小倉時代について直接取材した経験のある小林慎也氏と、異なる時期の清張を知る三氏です。時折エピソードを交えながら、朝日新聞社と清張の関わりと、その文学への影響について語りました。

小林氏 小倉時代の資料としては『半生の記』があります。このなかでは朝日時代を「概して退屈だった」としながら、特に戦後は、匿名で原稿を書いたり、英会話の勉強、ポスター展への出品など、活発に自己表現しています。後に小倉時代のことを小説に取り入れて書いています。「自分の体験はストレートに書かない。小説の中で書く」という言葉は、考えさせるものがあります。私小説はきらいだが、この時代のことには小説でさまざまに書いているということでしょう。対象に距離を置いて相対化する「観照」の態度は、この自伝にもうかがえます。これは、真実探求、旺盛な好奇心とともに、ジャーナリストの条件にもなります。朝日にいたことで、そうした特質を身につけたのではないのでしょうか。

安間氏 朝日新聞社時代の清張さんの中には膨大な知への飢餓感があつてそれを癒し埋めるべく一人で大変に孤独な勉強、努力を重ねたという気がしてなりません。芥川賞受賞の昭和二十八年から僅か五年の間に二七編もの作品を爆発的なエネルギーで発表しています。しかも、「或る『小倉日記』伝」「断碑」や「小説日本芸譚」「カルネアデスの舟板」といった清張文学の基底をなす作品「張込み」「点と線」など新しい推理小説の地平を切り開いた記念碑的なものも含まれています。文学にとどまらず、民俗学、美学、政治学、社会科学などあらゆる分野への知の蓄積がなければそれは不可能でしょう。生涯にわたる努力の結果として、そこに内在した巨大なタリクこそ、松本清張の天才たる証だと思っております。

中江氏 朝日賞受賞のとき、「推理小説でも動機とそこにある人間の心理が大切であるし、同時に動機の追及が社会の追究になる。」と述べられたのが印象に残っています。清張作品の魅力は、日本的な私小説の限界をつき破って、無力な生活者、常に生活に不安を抱えた孤独な人達、底辺にいる人達を社会とのつながりで浮き彫りにしたことだと思えます。もう一つ、清張さんの「ささきは、実は正史、正しい歴史といわれるものをどどんと掘り起こし、ジャーナリズムの限界をさらに超えて挑戦したのだ」と思っています。特に古代史では、学者が聞くに驚くような発想で、様々な問題に挑戦しています。定番になっている歴史に果敢に挑戦した、それが清張さんの真骨頂ではないかと思えます。

## 「清張と『半生の記』」 戦後の十年を中心に」



清張が最初の小説「西郷札」を書いたのは、昭和二十五年です。朝日の東京本社に転勤して退社するのは同三十一年。戦後復員してからの約十年が、清張の人と作品を考える意味で重要だと思われれます。助走(準備)の五年とスタートダッシュの五年をどう読み解くか。

例えば、「半生の記」はこの時代を知る一番貴重な資料ですが、「こ」に書かれていないこともたくさんあることは、今回の企画展でも証明できます。ほうき仲買のアルバイト、単調な社内の仕事は見える一方で、文学への指向、この時期に読んだ本などには巧妙に触れていません。それはなぜなのでしょう。また、書き出しで父の故郷を訪ね、結びが父の死で終わるのはなぜでしょうか。個人史ではなく、一族の歴史を意図したのでしょうか。

有名な一節「濁った暗い半生」をテーマに設定し、それに合った材料を中心にしたいと読めます。とはいえ、小説は突然書けるわけではなく、ある程度の準備期間が必要なのです。自己表現のかたちとしては、旅、ポスター、俳句、読書、歴史考証などから推測できるとしても、それだけで最初からほぼ完成された小説を書けるというのは、不思議としか言いようがないのです。

「西郷札」が、かすかすの幸運に恵まれたのは事実ですが、その後も、小倉で材料を得た作品「火の記憶」「或る『小倉日記』」伝「菊枕」などを次々に生み出します。それを可能にした筆力の源泉は何でしょうか。

こうした「影」から「光」への劇的な転換を示す十年が私たちの前に横たわっています。

今後の研究が待たれます。



# 平成13年度 市民文芸講座

●2月28日(木) 小倉リーセントホテル  
松本清張記念館では毎年〈市民文芸講座〉を開講しています。先生方の講義の中から一部をご紹介します。

## 「初期清張作品について」 企画展に関連して」



### ◆「文章はなはだ老練」

「西郷札」が清張の処女作ですが、読んでみても、破綻がないというか、処女作のもつある種の初々しさといったものはありません。「或る『小倉日記』伝」の芥川賞の選評でも言われているように、清張という作家の出発は、文字通りできあがった形で始まっています。

「西郷札」にはじまって、おおざっぱに小倉にいた時の代表的な作品についていうと、大きく揺れ動き移り変わる時代の流れに翻弄されている人間たちを描いています。さらに、作品自体の語り口が、主人公を(私)としていません。私というレンズに写ったものを描いていくという私小説的な発想、あるいは自分のことを書こうという意欲、そういうものを清張という作家はその最初から持っているのです。

### ◆「事実を見極める」

これら小倉時代の作品のほとんどが、不幸な主人公を描いていると読むことができます。ただし、清張は否定だとか肯定だとかそういう価値判断はしていません。清張はここで、一個の人間というものを見極めようとしているのではないのでしょうか。ある時代のなかで時代に翻弄される人間。その人間がどういうふうな時代とかがわり、時代に翻弄されて、死んでいったか。そういう人間のあり方を見極めようとしています。

事実を追求するというのは、世の中を見る時、感情的なあるいは感覚的な価値判断を与えるのではなく、事実を見極めていくという姿勢なのではないでしょうか。

不幸な人間たちが描かれているというところを、たとえば清張のコンプレックスだとか差別だとかそういうものの反映として見るのは、間違いいではないかということとですね。清張にとって、そうやってきちんと見極めることが、面白いこととあり、エネルギーだったんではないでしょうか。負ではなく、正のエネルギー。面白い話を作っていく、そういう部分がやはりこれらの作品にはあるのではないのでしょうか。



## 「松本清張記念館を訪ねて思ったこと・感じたこと」

# みんなの広場

- ・書齋や書庫が生前そのままの姿で保存してあるのが、何とも言えず、氏の雰囲気をかもし出して良かった。(50代・千葉・男)
- ・各作品のそれぞれのあらすじが判るような展示が欲しい。題名だけみても、なかなか内容が思い出せなくて残念。おおよその内容が思い出せればもっと親しみが湧くのでは。(50代・岐阜・男)
- ・清張先生の「疑ってかかる」というビデオからの声が耳についてしまいました。また、記念館の規模の大きさに驚きました。書籍も図書館のような豊富さに、先生の偉大さを思い知りました。(50代・熊本・女)
- ・情報ライブラリーで、蔵書は単に棚ごとのリストだけでなく、内容を詳しく検索できるとなるとおもいます。(40代・千葉・男)
- ・館内がきれいで、静かでもとて落ち着いた時間が過ごせました。家族で来て良かったと思っています。(40代・福岡・女)
- ・たくさん読んだつもりが、まだまだ読み残していることに気付きました。北九州にこの記念館が出来たこと、最上の喜びです。(年齢不詳・北九州・女)

### 編集部より

松本清張記念館には毎日たくさんのアンケートをお寄せいただいております。今回は松本清張記念館を訪ねての感想を掲載させていただきました。

最近のアンケートを拝見してまず思うことは、館内の設置物や展示方法、その他につき具体的な提言をいただく機会が多いということです。より良い記念館を目指しての皆様のご熱心な声を受け止め、記念館としても今後の参考にさせていただきます。

それから、「じっくりと見るには時間が足りない」という声も圧倒的に多く寄せられています。一度ならずも何度でも足を運んでいただき、じっくりと皆様自身の「清張」を探訪していただければと願っております。

今後とも貴重なご意見をお待ちしております。

このコーナーでは、アンケートなどで寄せられた意見をもとに、テーマごとに集約してご紹介しております。

今回は特にテーマを決めずに、最近の皆様の声を自由掲載いたします。

※アンケートは館内にも置いてあります。

## 友の会 活動報告

現在、松本清張記念館友の会では、平成13年度事業として様々な活動を実施しています。友の会会員数は、一般会員472人、賛助会員32組(14年2月末現在)を数え、事業ごとに毎回多数の会員が参加し、会員間の交流も活発です。

館報では、以後定期的に友の会活動についてその概況をご紹介します。

### ●文学散歩(11月22日:参加者56名)

大分県国東半島(富貴寺、真木大堂)および安心院町の清張自筆の「陸行水行」文学碑を訪問しました。当地は、小説「陸行水行」や「清張日記」にも登場し、清張自身、何度か訪れたことのあるゆかりの場所です。安心院の文学碑見学では、高田文義安心院町長に文学碑設立当時の思い出などを語っていただきました。



### ●作品朗読鑑賞会(3月9日:参加者40名)

NHK北九州文化センターボランティアグループにご協力を頂き、友の会事業としては初めて作品朗読鑑賞会を実施しました。元NHKチーフアナウンサーの楽しい講義の後、グループの中から3名の方に清張作品(「足袋」「断碑」「共犯者」)を朗読していただきました。



### ●前進座公演観劇

・司馬遼太郎記念館見学会(1月19日・20日:参加者25名)

劇団「前進座」から松本清張原作「無宿人別帳—左の腕—」を清張没後10年事業の一環として特別公演したいという申し出があり、それをきっかけとして友の会で同公演の観劇ツアーを企画したものです。開館して間もない司馬遼太郎記念館(東大阪市)を見学した後に、京都南座に移動して観劇。公演終了後には前進座の役者さんとの交流会も実施しました。



### ●「菊枕」「天城越え」読書会(3月14日:参加者19名)

文芸評論家・安間隆次先生を講師にお迎えして、「菊枕」「天城越え」読書会を実施しました。いわゆる講義形式を取らずに、各参加者がテーブルを囲んでそれぞれ意見を出し合い、安間先生がそれに対して解説やコメントを加えていくという形式で、歓談を交わしながら活発な意見交換が行われました。



### ◆記念館との共催事業

「清張忌」俳句募集(13年8月1日~10月31日)

「砂の器」読書会(13年10月6日・13日)

シンポジウム(14年2月26日)

### ◆今後の事業予定

ビデオ鑑賞会(6月22日予定)

友の会年次総会(8月4日予定)

会員募集中!

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

## 松本清張没後10年 記念事業

平成14年は、清張没後10年が経過する節目の年に当たります。記念事業に関する問い合わせもいただいています。

記念館では没後10年記念事業推進委員会をつくり、今後、記念講演・映画祭などの記念事業を実施していく予定です。

### 映画上映 (6月スケジュール)

記念館では、松本清張原作映画のビデオ上映を行っています。

6月の上映内容は次のとおりです。

	「波の塔」	
	「疑惑」	11:00～ 14:00～
6月3日(月)		
4日(火)		
5日(水)		
6日(木)		
7日(金)		
8日(土)		
9日(日)		

「波の塔」(松竹)1960年/99分  
キャスト/有馬稲子・津川雅彦 ほか

「疑惑」(松竹)1982年/126分  
キャスト/桃井かおり・岩下志麻・鹿賀丈史 ほか

## 第5回 松本清張研究奨励事業募集

松本清張記念館では、松本清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の真相を探求する松本清張の精神を継承していくため、松本清張研究奨励事業を実施しています。現在、第5回の研究企画を募集中です。詳しくは記念館までお問い合わせください。



### 募集要項

- 対 象** ①松本清張の作品や人物像を研究する活動  
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)  
※①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人または団体も可。
- 内 容** 入選者(団体)に200万円を上限とする奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など(様式は自由、ただし、日本語)を、平成15年3月31日までに応募してください。
- 選 考** 記念館内の選考委員会により選考します。
- 発 表** 審査終了後、審査結果を直接通知します(6月頃)。なお、採用された企画は翌年の6月末日までに実施成果を報告していただきます。



↑ 鶴田知也

「椎の木の家」は、鶴田の豊津への望郷の思いを作品にしたものである。また、鶴田は火野葦平の「糞尿譚」を中央で紹介したといわれる。

現在、豊津町八景山に文学碑が建っている。(中野吉明)

昭和十二年、鶴田知也は、勇猛なアイヌ酋長の血統を受け継ぐコシヤマインの蜂起、反逆への見果てぬ夢とその末路を描いた悲話「コシヤマイン記」で、第三回芥川賞を受賞した。

室生犀星はその選評で「この哀れな歴史のやうな物語は…(中略)…何か、むくつけき抵抗しがたいものに抵抗してゐるあたり、文明と野蛮とのいみじい辛辣な批判がある」と評した。

生涯、作家、画家、農家として活躍した鶴田知也は、明治三十五年小倉で生まれた。七歳のとき母方の養子になり豊津に移り、旧制豊津中学校を卒業後、東京の神学校に進んだ。鶴田は、滞在了した友人の郷里・北海道や豊津出身のプロレタリア作家葉山嘉樹の影響のもと、労働運動に身を投じ『文芸戦線』の同人となった。

北九州文学マップ — 鶴田 知也



鶴田知也文学碑→



← 鶴田知也の旧宅  
現在は廃屋となっている。



## 自画像を描いた 益子焼の皿



第二展示

室に、益子

焼の皿が展

示されてい

ます。横の

講談社社

長の結婚祝

いに贈った

書画帳の墨

絵や、色紙

の伝奈良般若寺佛頭なども巧みなものですが、薄褐色の皿の面には珍しい自画像が描かれています。軽やかなタッチの墨画です。横顔ですが、口もとの特徴をよくとらえ、眼鏡の目には生氣があり、今にも語りかけてきそうです。

清張は小学校のときから墨画が好きで、「絵の成績は級で一番だった」と『半生の記』に書いています。印刷屋に入ったのも「絵に関係していること」が一つの理由でした。そこで広告圖案に目覚めます。『広告界』（広告デザインの雑誌）を参考書に独学し、日本画家に絵を教わりました。仕事は辛かったようですが、油墨で版下をかくより、泥絵具などを使って「スケッチ」（原画）をかく方がずっと楽しかった、とその頃を述懐しています。

その後、朝日新聞西部本社に勤め広告版下を描く傍ら、清張は社外のデザイナー仲間と交際し競作発表会を開いたり、観光ポスターコンクールに出品し賞を取りました。その力量は、当時の九州デザイナー界の長老、中山文孝氏から小説もいいが、「デザインの仕事はやめなさい」と惜しまれたという挿話からも判ります。社の絵画展に出品した記録もあり、同僚を描いた似顔絵も記念館には残っています。

展示の皿に話をもどしましょう。自画像の左横に、

昭和五十五年二月二十四日 於益子とあります。

「清張日記」にも、

益子にまわる。「益子センター」に寄つて素焼の皿に「自画像」を描き、コー

ヒー茶碗二個を買う。

との記事があります。ただその日付は「昭和五十五年二月十五日」です。

またその前段に、その日は朝から「十万分の偶然」（『週刊文春』昭和五十五年三月二十日）五十六年二月二十六日の取材のため、栃木県鹿沼に行ったと記されています。作品の終盤、婚約者を殺された男が写真賞の審査委員長への復讐を果たす場面で、委員長に大麻煙草を吸わせて幻覚を見せ、無線塔から墜落死させるのです。その大麻は男が車を使い鹿沼の田舎から盗んできたものでした。その栽培、収穫の時期や、大麻泥棒やその対策の実態などを調べるための取材のようです。

取材に同行した編集者の方に益子の件をお尋ねしました。しかし記憶になく、当時の手帳にも益子に関するメモはないとのことでした。別の人と一緒か一人で寄ったのでしょうか。時間があくと、一人でも名所旧跡や興味のある所に見学に出かけていたとはよく聞くところです。それも単なる観光見物ではなく、必ずといっていいほど後の作品に生かされ、立派な取材になっていたと。益子行もそういう意味での清張独特の「取材」であったかもしれませぬ。

しかし、展示の益子焼皿の自画像がうかべる穏やかな表情や、そののびやかな線を見ていると、素焼の皿を前に好きな絵を描くのが楽しく、作家になる以前、いや、少年の頃に戻つて、夢中で筆を動かす清張の姿を思い浮かべたい気もします。

（学芸担当 中川 里志）

## きよしとハルコの探検！清張記念館

IF 常設展示室“全著作パネル”の巻



きよし それにしても、すごい数だね。何冊あるの？

ハルコ 700冊あるのよ。一冊目が、ほら「戦国権謀」で、最後が「神々の乱心」。40年の作家生活で700冊を割って…と、

きよし 17.5。年間17冊？毎月1冊以上本が出てたってこと！？

やはり日本のイメージってこんなの。「点と線」(伊)



しかも40年も続けて。あらためて尊敬しちゃうよ。

ハルコ きよし君じゃ全部読むのも難しいかも。うふふ。みてみて、外国語の清張作品もいっぱいあるわよ。

きよし 何の作品なのかまったく分からないのもあるね。きっと外国の読者もこの本でキドキしたり、感動したりしたんだろうなあ。あ、あその作品には色々思い出があるんだよね。

ハルコ 私はこの本読んでたときは…片思いの人にフラれて…、このときは財布を落として…この本は…あつ！きよし君に貸したままだ。

きよし ハ、ハルコちゃん？

常設展示室入口にそびえたつ高さ5m、幅8mのパネルは清張作品の小宇宙。一冊一冊、個性あふれる装丁は見るだけでも楽しく、読んだことのある本を見つけた時には蘇る色々な思いが時の経つのを忘れさせます。当記念館の目玉、全著作パネルはじっくりご覧下さい。

# 『松本清張研究』第三号発行

定価2000円



『松本清張研究』は、全国の第一線研究者を網羅し、さらなる研究の推進と後継者の育成をめざして、年一回、記念館で発行する研究誌です。今回の特集は「清張文学と旅」。特に『ヨロッパ』「草の径」取材日記は初公開で、貴重な研究資料です。

過去への旅 — 清張ミステリーの原点 —

山田有策

## 特集 清張文学と旅

清張流「旅はひとりがいい」 宮部みゆき、川本三郎、半藤利

『半生の記』に描かれた旅

平岡敏夫

死の彼方までの旅 — 『砂漠の塩』論 —

天沢退二郎

初老の憧憬、もう一人のゴーガン — 「駅路」論 —

花田俊典

清張文学における「旅」 — 『砂の器』の記号論 —

仲正昌樹

清張・初期作品における「旅」

赤塚正幸

旅の時間の松本清張

宮田稔栄

〈再録〉旅のエッセイ「ひとり旅」時刻表と絵葉書と「耶馬溪から水郷日田へ」

松本清張

〈初公開〉ヨーロッパ「草の径」取材日記

松本清張

『草の径』取材随行者座談会「あの旅行は楽しかったね」 藤井康栄、岡崎満義、田中光子

高橋和夫

〈エッセイ〉『火の路』の旅Ⅱ

藤井康栄

清張ミステリーと女性読者 — 女性誌との連携を軸として —

藤井淑禎

記念館だより

松本清張研究について／平岡敏夫  
歌と石と植物と／山田有策  
『天城越え』は「伊豆の踊子」を  
どう起えたか／藤井淑禎



創刊準備号  
定価500円

◎特集 清張と海外  
森嶋外と松本清張／平岡敏夫  
開館一周年記念シンポジウム  
（松本清張にとつて海外とは）  
小倉郷土会と松本清張／小林安司  
流論へのまなざし／宗像和重



創刊号  
定価1,500円

◎特集 清張と菊池寛  
座談会／井上ひさし、平岡敏夫、山田有策  
『形影』菊池寛と佐佐木茂案／片山宏行  
清張と歴史教育／仲正昌樹



第二号  
定価2,000円

好評発売中!  
お申し込みは記念館へ

### ● 編集後記 ●

館報が第9号、研究誌が第3号。  
いよいよ頑張るのみです。  
皆さんの声、意見をお寄せください。  
(中野 吉明)



イラスト：山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813

北九州市小倉北区城内2番3号

TEL 093(582)2761

FAX 093(562)2303

http://www.kid.ne.jp/seicho

制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス J R: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
バス: 小倉北警察署前/NHK前下車  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

